

麻疹をあなどるなかれ

天理参考館学芸員

幡鎌 真理 Mari Hatakama

「日本において5月は風薫る爽やかな季節である」という書き出しで、2018年の同じ5月にここで「疱瘡神と赤」と題した小稿をあげた。まだ新型コロナウイルス感染症襲来以前のことで、1980年5月8日にWHOが発表した地球上からの天然痘根絶宣言にちなんで疱瘡(天然痘)について書いたものである。まさか、その後あのようなパンデミックに世界中が襲われるとは知るよしもなかった。そして、その新型コロナウイルス感染症は落ち着きを見せ、昨年厚生労働省は感染症法の位置付けを5類感染症に下げた。その移行がなんと5月8日である。因縁を感じずにはいられない。同じ5類感染症に含まれるのが、最近流行が顕著な麻疹である。感染症とは、微生物や菌、ウイルスが体内に侵入し、感染して増殖を続け、ついには発症する疾患をさす。感染して病気を引き起こす生物を病原体と呼び、ウイルスは細菌より小さい。感染源となる病原体は自分では移動できないので、くしゃみの飛沫や飲食物など、必ず何かにくっついて人間の体内に侵入する。感染症の代表的な感染経路は、接触感染、飛沫感染、空気感染の3つとされる。頻度の高い感染経路は接触感染で、逆に低いのは空気感染らしい。手すり、スイッチなどの表面を介しての接触で簡単に病原体が付着する。特別なことをするよりも、手洗いが感染を防ぐのに有効な策であると喧伝されたのは道理に合っているのだ。満員電車で息をひそめるより、無防備にあたりを触らない方が得策なのかもしれない。

さて5類感染症の1つ、麻疹だが、「平成19・20年に10～20代を中心に大きな流行がみられたが、平成20年より5年間、中学1年相当、高校3年相当の年代に2回目の麻疹ワクチン接種を受ける機会を設けたことなどで、平成21年以降10～20代の患者数は激減」と厚生労働省のホームページに記載がある。また、「平成27年3月27日、WHO西太平洋地域事務局により、日本が麻疹の排除状態にあることが認定され」ている。現在麻疹に罹患したら、それはほぼ海外由来の型らしい。しかし、決してあなどれない恐ろしい感染症であることに変わりはない。麻疹は天然痘より“軽い”ように思ってしまうが、感染力は天然痘より高く、ひとたび流行するとその地域の全住民が罹患する。肺炎などを併発して死亡率も高い。江戸時代に疱瘡は顔に癩痕が残るため、「顔さだめ」とも呼ばれたが、麻疹の別名は「命さだめ」である。麻疹が死を連想させる病気だったことがうかがわれる。麻疹の起源は紀元前3000年頃にまでさかのぼり、メソポタミア地方が誕生の地とされる。7世紀のペルシアの医師ラーゼスは、麻疹は子どもが経験する自然現象と考えていたことが記録に残っている。14世紀になると、明代の医学書『古今医鑑』に、はしかを意味する「麻疹」という言葉が登場した。日本では「はしか」と呼び慣わされ、あかもがさ赤斑瘡、いなめがさ稲目瘡とも言われた。平安時代の10世紀に麻疹は京で大流行する。現在放映中の大河ドラマ「光る君へ」の時代である。道長の娘、彰子が入内する一条天皇も発病し、「皮膚に赤い発疹が広がり」と記録が残っている。一条天皇はその3年前に流行した疱瘡にも罹患しており、病状が異なるのでそれぞれに罹ったことがわかるのである。疱瘡も麻疹も二度罹ることはない。その疱瘡が流行した時期に道長の長兄、道隆は亡くなっ

た。道長は、兄たちがこのころ相次いで亡くなるのを目にして、200年前の凶事、天平の疫病大流行で藤原四兄弟(武智麻呂・房前・宇合・麻呂)が続げざまに疱瘡で命を落としたことを思い、恐怖したことだろう。明日は我が身か、と。幸いにもこのときは事なきを得て、五男坊で家督継承順位3番目にすぎなかった彼は、その後栄華を極めていくことになる。しかし、“禍福は糾える縄の如し”。30年後の再びの麻疹大流行で、妊娠中から麻疹に罹っていた娘の嬉子が、後の後冷泉天皇を出産した2日後に亡くなってしまふ。19歳の娘を失った失意の道長はこの2年後に亡くなり、後冷泉天皇を最後に摂関政治も終わりを迎えるのである。表舞台から退き、藤原氏の“望月”も徐々に欠けていくことになる。江戸時代には13回もの麻疹の大流行があり、5代将軍徳川綱吉も成人で麻疹に罹患して亡くなったと言われている。

疱瘡も麻疹も予防法も治療法もよくわからず、貴族も将軍も命を奪われる恐ろしい病であったため、人々は神に祈りを捧げ、魔除けとして赤色の絵や人形を置いて回復を願うしかなかった。赤色の絵が疱瘡絵、はしか絵と呼ばれる赤一色で刷られた錦絵で、江戸時代後期に流行した。はしか絵では、疫病神を退治してくれそうな強い武人が勇ましく描かれていたり、麻疹を避けるまじない文がびっしりと記されていたりする。疱瘡絵も

はしか絵もともに疫病除けだが、疱瘡絵は張り子などをモチーフに病気の「軽さ」を願うのに対し、はしか絵は疫病神を撃退する「攻撃性」が見られる。両者ともに



図1 引札 大阪 34.5×51.4cm

これは「はしか絵」ではなく、商店の広告刷物の「引札」だが、ここに描かれる鍾馗も赤一色で描かれ、疫病神を投げ倒す強さを示している。(天理参考館蔵品)

おり、区別が付けがたい疫病であったが、人々の受け取り方がそれぞれで異なっていたのではないかと考えられる。その理由の1つが流行周期の違いである。疱瘡は周期が短く、江戸時代後期には常時蔓延していた。おそらく乳幼児の多くが罹り、生死の境を体験したことだろう。しかし、一度罹ると二度と脅かされることはない。すなわち、大人になって疱瘡に罹る人は少なかったのである。一方、麻疹は20年から30年と流行の周期が比較的長く、成人後も場合によっては罹患する恐れがあった。そのため撃退する意識が強く作用したと考えられる。はしか絵には、疱瘡絵のような愛らしい赤玩具は描かれない。

麻疹ウイルスは冒頭に述べた通り、空気感染によって人から人に急速に感染する。感染が顕著な時期は、奇しくも春から夏にかけての気持ちの良いこの季節である。抗ウイルス薬はないので、現在もワクチン予防接種しか感染を防ぐ手立てがない。適切な方策でなんとか疫病の蔓延を防ぎたいものである。